

た。

第七節 災害の記録

一 古代からの地震の記録

南海震災当時の浅川湾の大手海岸は、渚には小波が立ち波静かな砂浜がつづいており、その中央に木造の棧橋（六〇影）があるだけの自然の良港であった。

しかし一面、地震による津波に対しては、典型的なV字型の湾をなしており、そのうえ遠浅で、津波が最も増幅しやすい形態をなしている。

このような立地条件から、白鳳の昔から、津波による受難の歴史があり、記録として残されているのは、慶長の津波以来で、それ以前の津波については、発生 の位置や規模から考察して、当然この浅川湾にも影響があったものと思われる。

それらを時代順に挙げれば次のとおりである（南海地震津波の記録『宿命の浅川港』より）。

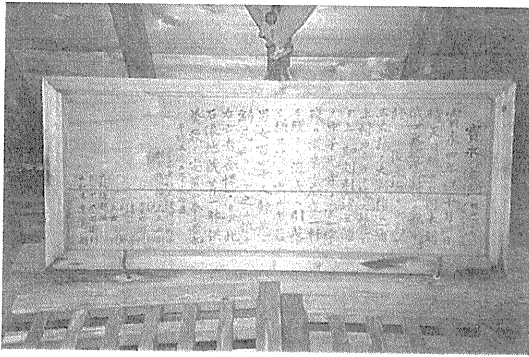
- 1 天武十三年十月十四日（六八四年十一月二十九日） マグニチュードM \parallel 八・四 白鳳地震による津波
- 2 仁和三年七月三十日（八八七年八月二十六日） マグニチュードM \parallel 八・六
- 3 康和元年一月二十四日（一〇九九年二月二十二日） マグニチュードM \parallel 八・〇

- 4 正平十六年六月二十四日（一三六一年八月十三日） マグニチュードM \parallel 八・四
 - 5 永正九年八月四日（一五二一年九月十三日） 幻の津波
- 右の「幻の津波」とは、突喰で三七〇〇余名の死者を出したと地元の記録にはあるが、そのような被害規模にもかかわらず、他の地でそうした記録がみつからないことによるものである。
- それ以後の大津波で、浅川に被害を及ぼしたものについては浅川に関する記事が残されている。それらを示すと次のとおりである。

- 6 慶長九年十二月十六日（一六〇五年二月三日） マグニチュードM \parallel 七・九
慶長の津波
- 7 宝永四年十月四日（一七〇七年十月二十八日） マグニチュードM \parallel 八・四
宝永の津波
- 8 嘉永七年十一月四日（一八五四年十二月二十四日） マグニチュードM \parallel 八・四
安政の津波
- 9 昭和二十一年十二月二十一日（一九四六年十二月二十一日） マグニチュードM \parallel 八・一
南海地震津波
- 10 昭和三十五年五月二十四日（一九六〇年五月二十四日） マグニチュードM \parallel 八・五
チリ地震津波

右の津波のうち、嘉永七年とあるのに、安政の津波と呼ぶのは、この年の十一月二十七日をもって嘉永から安政と改元したことによる。

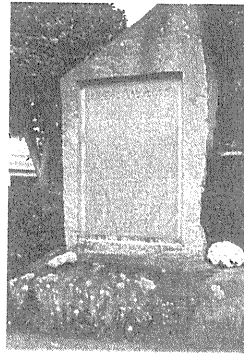
現在海南町では、津波の被害防止対策として、新防潮築堤と、山頂に登る



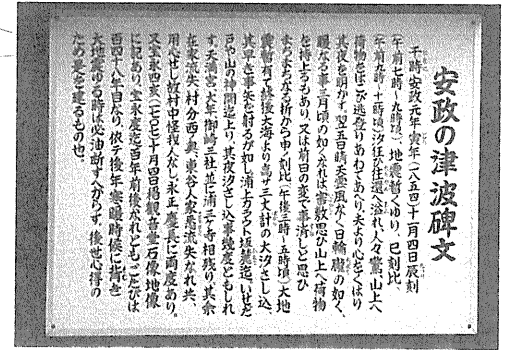
宝永の津波碑文（イナの観音堂）



愛宕山より見た津波の惨状（須賀崎東ノ町附近）
（「南海大地震浅川村震災誌」より）



昭和南海津波の碑文
（天神社）



安政の津波碑文（天神社）

緊急避難道の整備と共にバッテリー付の誘導燈が設置されている。

二 南海地震のこと

津波体験記（丸山盛夫手記）

大地震である。驚いて裏の畠に逃げた。このとき、あるいは津波が来るのではないかと予感がした。浅川は慶長の昔、磯ヶ浦（浅川浦）が全滅している。宝永、安政年間にも大津波があった。余震はなお続き、立つてはおれない。家から約二〇分先は海である。海岸に出てみたが、まだ海には変化はなかった。とにかく大地震である。津波の危険が脳裡をかすめたので、まず逃げようと、家族それぞれ荷物を持って、江音寺に避難した。昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日午前四時一九分紀州沖を震源とした南海地震の日である。寺に

難した。昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日午前四時一九分紀州沖を震源とした南海地震の日である。寺にまだ誰も避難していない。持参した荷物を寺に置いて、様子を見に御崎神社まで行く。まだ視界は暗いが、遠くで「津波がくるぞ!!」の声を聞いた。とにかく高い処へと夢中になり、いつのまにか愛宕山に登っていた。その闇の空に「ごうごう、ぱりぱり」と底から突きあげてくるような音がする。街や、家屋が破碎される音である。海上には点々と漁火が見える。そのころはスルメイカの大漁が続いていた。イカ釣りの火である。その船が近くへ流れてきたと思った一瞬、火が消えた。転覆したのである。他の一隻は海岸線を左に流れ、三浦海岸から大田の奥に突っ込んでいった。下の街はまだ破壊される音が続いている。もう浅川の街はあるまいと思いつ

つ、ただ呆然と闇の中に立ちすくんでいた。

視界が開けてきた。浦上川に沿って須賀崎、東の町は跡かたもなく、川には破壊物が積み、陸地と区別がつかず荒廃している。大きな漁船が、家押し潰している。新屋敷の町も海に向かって道が開けているため、浦上川と同じように津波の流路となり、道筋の多くの家が倒壊している。浅川湾は、高山（今の防波堤）附近まで、破碎物が海面を覆いつくしていた。

山伝いに弁天山から西の町に降りる。西詰の道は漁船や破壊物で、破損をまぬがれた家の軒下まで山のようになっている。近所の人と一緒に避難を誘ったのに、この人はここで死んでいた。更に新田附近は、ここまで流されてきた破船や、家屋の破碎されたもので覆いつくされていた。

なお谷合の入口には、貨物船が乗り上げていたし、特に大田部落の被害はひどく、家屋のほとんどは流失し、多数の死者も出した。ここも津波の終点の一つであったものだろう。